

ocube

club ozone membership magazine for professional



オキューブ 2009.5.1

recommended this

housing by le-sapo
ozone showroom news

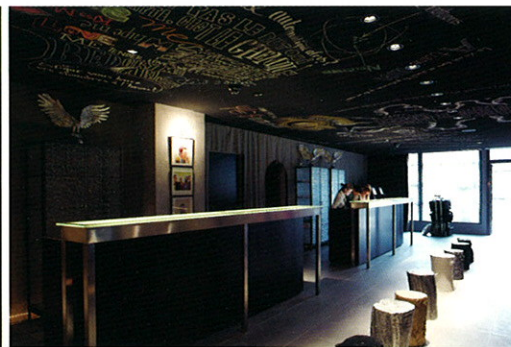
ozone information
member's voice

design topics
factory quest

creator's report
interview with expert

May 2009 volume 146

ocube



パリに新風吹き込む プロモーター シジル・アウイゼラト

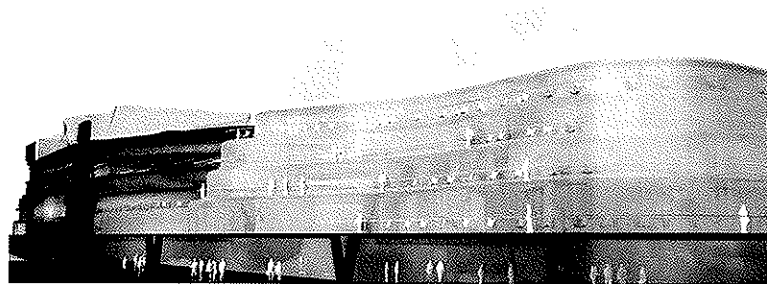
text by Yukari Miyamoto

cyril aouizerate



シジル・アウイゼラト 1969年フランス生まれ。出身地トゥルーズそしてパリの大学にて哲学を専攻。オランダの哲学者・神学者スピノザを研究する。1995年に建築家ロラン・カストロと出会ったことがきっかけで、パブリックスペース建設に興味を抱く。1997年大手プロモーター、アルタレア入社。ワインの貯蔵地だったパリ、ベルシー地区の開発に携わり、新しいショッピング&カルチャー街ベルシー・ヴィラージュのプロジェクトを成功させる。2003年アーバンテック設立。問題を抱える土地・物件を専門に集合住宅、ホテル、商業施設、文化施設などの開発を手がける。現在社員は2名。プルターニユ、ロリオン市の集合住宅(2003年)、コンサートホール「フレッシュ・ドール」(2005年)など。www.cyrilaouizerate.com

左ページ：パリの西端、パニョレ地区にオープンしたホテル・ママ・シェルター。設計はロラン・カストロ、インテリア・デザインはフィリップ・スタルク。グラフィティの多いこの地区、周囲との共存を考え天井に大胆なグラフィティアートを施した。アイデア勝負で安い家具や素材をデザインに活かし、活気のあるスペースをつくっている。レストランには有名シェフ、アラン・サンドランスを迎え、コンサートなども定期的に開催。



上：現在折衝中のサンク・コンティナン（仮称）。設計ニコラ・ダ&オリビエ・ペリコ。こちらはパリ北端。環状線をまたぐ形で商業・文化・スポーツの総合施設を計画。下：アーバンテックのホームページ。



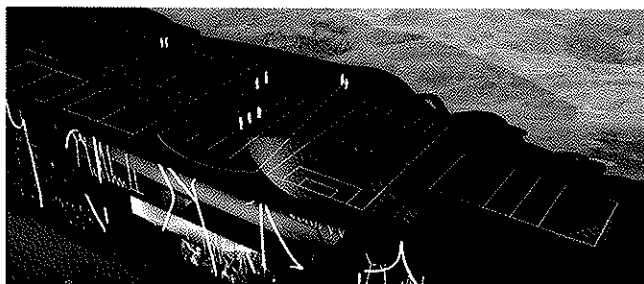
フィリップ・スタルクといえば、世界のあちこちでデザイン・ホテルに着手しているの、「スタルクのホテルがオープンした」と聞いても今さら驚かないのだが、何故か1軒も着手していなかった地元パリで昨年相次ぎ2軒のホテルを手がけたのは意表を突かれた。しかも、そのふたつがまさに両極端を行っていたのだから。ひとつは最高級として「パラス」と称するホテルに数えられる、ホテル・ムーリス。場所はパリのど真ん中でチュイルリー公園向かい。昨年夏レセプションやレストラン、バーをリニューアルした。それに反して、秋にオープンしたママ・シェルターは、パリではなかなか見つからない

リーズナブルな料金設定のホテル。しかも場所は観光客が足を伸ばすことなどまずない西の端、パニョレ地区である。この土地にデザイン・ホテルができようとは誰も想像していなかった。

このプロジェクトの立案者が、アーバンテックのシリル・アウゼラトだ。古い車庫ビルが残され、あまり機能していなかったこの土地に以前から目をつけていたという。地中海クラブ創立者のひとり、セルジュ・トリガノと手を組み、スタルクを口説き落とす。おそらくムーリスとは桁違いで低い予算であるこのプロジェクトに、「ぜひやってみよう」と間髪をいれずスタルクに言わせただ

ある。そしてパリ市への折衝。敷地内にメディアセンターを備えるという条件つきで、ホテルの建築へ漕ぎ着けた。

シリル・アウゼラトが率いるアーバンテックは、一般にプロモーターと呼ばれる仕事をしているわけだが、他のプロモーターとはちょっと違う。何が違うとって、アウゼラトの外見からして違う。ヒゲをたくわえ、ユダヤ神父のような風貌。スーツ姿にしても革ジャケットにデニムにしても、人が振り返るような超モードな着こなし。一度会っただけで忘れられない強いインパクトを放っている。そもそもアウゼラトは営業畑の出身ではない。大学時代オランダの哲学者スピノ



ザについて研究をしていた。「存在」「認識」について問い質し続けた結果、街の移り変わり、人の生活の変化に興味をもつようになり、不動産の世界に入ったという。大手プロモーター会社でベルシー地区の開発に携わり、2003年アーバンテックを設立。この会社は、「労働者階級の地区、廃墟、何かしら問題を抱えている物件を扱うこと」をフィロソフィーとする。

「16区（高級住宅地とされ、かつてBCBGという言葉を生んだ地区）やサン・ジェルマン地区みたいな、もうできあがっちゃった場所には興味がないというか、他に適任者がたくさんいるし。発展の可能性のある場所に惹

かれるし、難しい地区にこそアイデアが湧く」とアウゼラト。「僕自身、労働者階級の出身だし」とつけ加える。

たとえば集合住宅プロジェクト。パリでは、古い建物を保存しているため、住居総面積を増やすのが難しい。しかもユーロに変わってからの物価高騰で、住宅問題はさらに深刻である。家族向けの大きなアパルトマンはあるが、もちろん売値も家賃も高い。ステュディオと呼ばれるワンルームもあるがそれなりに高く、もちろん家族には不向きだ。子どもを持つ中流家庭が住める家が極端に不足している。「新しい集合住宅を建てる際、他のプロモーターだったら何も考えず、大半に70㎡以上の3DKを入れるんですよ。でも、今本当に必要なのはもっとコンパクトで、しかも家族で暮らせるアパルトマン」と、アウゼラトは40㎡で家族4人が快適に暮らせる空間を建築家と検討し、企画を推進している。

ホテルのママ・シェルターも同じ考えのもとに企画された。100ユーロ以下のホテルを見つけるのが難しいパリで、79ユーロからという安い料金設定。全室シャワーのみでバスタブをつけずスペースを節約した代わりに、各部屋にMacを装置、レストランにはルカ・カルトンで三つ星を獲得したアラン・サンドランスをシェフに迎えるなど、違った快適さが加えられた。安い家具に手を加えてスタイリッシュに再生させるなど、フィリップ・スタルクも限られた予算でユーモアたっぷりに技を發揮。また、この地区はグラフィティ（落書き）が多く、もとの車庫ビルも見事に下から上まで覆われていたが、ホテルの天井や床にもグラフィティア

ー的なき文字やイラストのデザインを施し、周りの環境への呼応を考えた。このホテルの60%はトリガノー・ファミリー、残りの40%はアーバンテックの所有であり、アウゼラトは経営にも積極的に関与している。ママ・シェルターは同じコンセプトでリヨンとマルセイユでも計画中だという。大西洋を渡ったアメリカでも、ニューヨークのブルックリン、ロサンゼルスで話が浮上しているらしい。

他に、現在進行中のプロジェクトで、パリの「サンク・コンティナン（仮称）」がある。「世界から人が集まり、異文化が交わるパリのマーケット」を企画しているという。「サンク・コンティナン」はフランス語で「五大大陸」の意味。場所はパリ市の最北ポルト・ド・ラ・シャペル、環状線道路をまたぐ大型総合施設を考えており、ホテル、ショップ、レストラン、コンサートホール、スポーツ施設を含む予定という。「パリは多文化の人間が集まる都市で、中華街やアラブ人街、インド人街などが散在する。それらを一堂に集めようというのがこの施設のコンセプトで、10㎡程度の小さな店舗に、寿司のデリカテッセン、アフリカの工芸品店、北欧のデザインショップ、インドのアクセサリーショップなどを入れる計画なんです。家賃は5万円以下と低く設定し、多くの資金を持たなくても、よいアイデアがありクオリティーの高いものを提供してくれるテナントをセレクトして貸す予定」。深夜12時まで開けて、パリ中心地の仕事から周囲の住宅地に帰る市民たちが気軽に立ち寄れるような施設にしたいと抱負を語る。この仕事には、アイデアやチームづくりに加えて、予算組みや交渉力が必要とされる。プロジェクトの実現に向けて、日々パリ市との折衝を続けているようだ。